

上 海 [上]

1991年 4月12日 初版第1刷発行

1991年 6月28日 初版第2刷発行

著者——クリストファー・ニュー

監修者——藤井省三

訳者——長堀祐造・斎藤兆史・宮尾正樹・古田島洋介

発行所——株式会社 平凡社

〒102 東京都千代田区三番町5

電話 東京03(3265)0471[編集]

03(3265)0455[営業]

振替 東京8-29639

印刷・製本——中央精版印刷株式会社

ISBN4-582-82847-7

NDC分類番号933 四六判(19.4cm) 総ページ544

落丁・乱丁本のお取替は直接本社読者サービス係までお送りください
(送料小社負担)。

Shanghai
by
Christopher New

Copyright ©Christopher New, 1985
First published in Great Britain in 1985
by Macdonald & Co (Publishers) Ltd, London & Sydney

Japanese edition (1st vol.) ©Heibonsha Ltd, Publishers, 1991
Printed in Japan

目次——上海
^上
v

第一部

| | | |
|-----|------------------|----|
| 第一章 | 到着 | 13 |
| 第二章 | 宿舎 | 25 |
| 第三章 | 税関局 | 31 |
| 第四章 | ローカルニュース | 34 |
| 第五章 | 人力車で | 36 |
| 第六章 | 税関職員食堂 | 38 |
| 第七章 | 競 ^せ り | 43 |
| 第八章 | 故郷 | 46 |
| 第九章 | はじめての朝 | 50 |

| | | |
|------|-----------|----|
| 第十章 | 口頭試問 | 55 |
| 第十一章 | 初仕事 | 58 |
| 第十二章 | エミリーからの便り | 67 |
| 第十三章 | 教会 | 69 |
| 第十四章 | 中国語教師 | 72 |
| 第十五章 | ブラウン夫妻の招待 | 76 |
| 第十六章 | 情報提供者 | 83 |
| 第十七章 | 密輸 | 85 |
| 第十八章 | 両親への手紙 | 88 |
| 第十九章 | 呉淞砲台 | 91 |
| 第二十章 | 遺体確認 | 94 |

| | | |
|-------|--------------------------|-----|
| 第二十一章 | イートン師 | 102 |
| 第二十二章 | 茶館 | 110 |
| 第二十三章 | 懊惱 | 119 |
| 第二十四章 | 婚約破棄 | 124 |
| 第二十五章 | 狩獵旅行 | 134 |
| 第二十六章 | 差押え | 151 |
| 第二十七章 | 歌姫素梅 <small>スイメイ</small> | 161 |
| 第二十八章 | あばたの陳 <small>チエン</small> | 176 |
| 第二十九章 | 阿片宿 | 190 |
| 第三十章 | メーソンとの対立 | 199 |
| 第三十一章 | 罨 | 206 |

第二部

| | | |
|-------|---------------------------|-----|
| 第三十二章 | 素梅の身上話 | 216 |
| 第三十三章 | 突然の解雇 | 227 |
| 第三十四章 | 魏 <small>ウエイ</small> の申し出 | 235 |
| 第三十五章 | 新しい生活 | 246 |
| 第三十六章 | ラーセン父娘 | 261 |
| 第三十七章 | いさかい | 277 |
| 第三十八章 | コレラ | 282 |
| 第三十九章 | 上海クラブ | 295 |

| | | |
|-------|--------------|-----|
| 第四十章 | 素梅の妊娠 | 310 |
| 第四十一章 | エルサレム・ハウス | 322 |
| 第四十二章 | プロポーズ | 335 |
| 第四十三章 | 帰郷 | 346 |
| 第四十四章 | 十ヶ月後の上海 | 356 |
| 第四十五章 | 晚餐 | 366 |
| 第四十六章 | 結婚 | 377 |
| 第四十七章 | 披露宴 | 385 |
| 第四十八章 | メアリーⅡ エレンの妊娠 | 395 |
| 第四十九章 | 参事会での提案 | 405 |
| 第五十章 | 新しい生命 | 415 |

| | | |
|-------|------------|-----|
| 第五十一章 | 第一次世界大戦 | 424 |
| 第五十二章 | メーソンの阿片 | 436 |
| 第五十三章 | 再会 | 449 |
| 第五十四章 | 競馬 | 464 |
| 第五十五章 | 追い討ち | 470 |
| 第五十六章 | ジョナサンの病 | 484 |
| 第五十七章 | 息子の死 | 491 |
| 第五十八章 | ヘレン・ボールトン | 504 |
| 第五十九章 | 二人の関係 | 513 |
| 第六十章 | 妻との破局 | 524 |
| 第六十一章 | 上海クラブからの通告 | 531 |

葦丁
宮城安総

第一部

第一章 到着

彼が目をさましたのは、船のゆれが変わったからに相違なかった。外海での横ゆれが入江の風ぎにおさまろうとしていた。デントンは片肘で身をささえながら、舷窓から外をながめた。すると、あたたかく湿った大気が、彼の顔にかかっていた。夜明けだった。東の空はうっすらと朝やけ、風いでまだ暗く油を流したような水面の彼方には、わずかながら陸地の輪郭が識別できた。それは海上の闇よりも、濃くはつきりと水面にけぶる砂州さすであった。

こみ合った船室の乗船客たちは、まだ寝息をたてて休んでいる。彼らを起さぬよう、デントンはすばやくそつと着がえると、下甲板にあがっていった。甲板に立つころには、陽はすでに水平線上に昇っており、川の両側の堤が鮮明に姿をあらわし、ぐんぐんと船にせまってくるのだった。ちょうど水先案内人が乗船してくるところだった。彼のランチはすすけた灰色の煙突から黒煙をはき、

水紋をえがきながら、堤の上の、灰色の石でできたあばら屋の建ちならぶ方へとむかって行った。黄土色ににごった水面は、朝日のあしの長い斜光の下で、きらきらと輝いていた。

デントンは一時間以上も船尾にもたれかかりながら、田舎の風景が静かに眼前をよぎっていくのをながめていた。緑あざやかな碁盤の目のような水田、密生した背のたかい竹林、鎮座する石と泥の家からなる村々、朝日に照りはえる弧状に葺かれた瓦屋根の廟堂……。いたるところ、せまい水路が田地をあみ目状につらぬき、そのゆるやかな流れが緑色のなかできらめいていた。村々はひっそりと人氣もないように見え、犬の鳴声さえなかった。しかし、水田は潑刺と生氣にあふれ、男も女も膝まで泥につかりながら、両足をふんばり前かがみの格好をしている。田植えをしているのだ。彼らは皆、あさい円錐形をした幅広の麦わら帽をかぶっており、その褐色をおびた黄色いつばは肩までおおっていた。つばの下からは、男女の別なく辮髪にした黒髪をぶらさげている。時おり、その農民たちはゆっくりと腰をのばし、蒸気をはきながら遠くを航行していく定期船に目をやるが、やがてまた腰を折り、田植えにもどるのだった。ときにデントンは、

水牛がわずかながら植えつけられぬままになっている田んぼの泥の中をとぼとぼ歩いたり、あぜ道を調子よく歩を進めるのを目にすることもあった。灰色に泥水でよごれた水牛は、先のとがった棒を手にした半裸の子供たちに追われている。子供たちは奇妙なかん高い叫びをあげ続けている。船にむかってにやにやしたり、しかめっつらをしたりしながら手をふる子供もいる。これが中国なんだ、デントンはなけば畏敬の念にうたれつつ考えていた。これが中国というものなんだ。

そのときエヴェレットが話しかけてきた。「ところで、もう呉淞砲台は過ぎましたか？」彼はデントンのかたわらの手すりを、しみのある手で握りしめながらこうたずねた。

「呉淞砲台ですって。」

「ええ、そこで水先案内人が乗りこむんです。廃墟ですがね。一八四〇年かそこいらにイギリスが砲撃したんです。上海を占領した時にね。」

「ああ、そういえば案内人が乗りこむのを見かけましたよ。」

エヴェレットはうなずき、すーすーと長く引っぱるような音をたてながら、深くそして同じ間隔で鼻から息を

するのだった。「また、見るようになりますよ。そこには税関もありますからね。」

二人の頭上の一等甲板で朝食を知らせる鐘が鳴りわたった。鳴らしているのは、横柄そうにP&O汽船会社「イギリスの海運会社、ペニンシュラ・アンド・オリエンタル汽船会社の略称」の白い給仕服に身をつつんだ、なまっちょろいにきび面の若者であった。というところは二人にとっても、そっけない木製テーブルが置かれ、くさりかけたような料理のにおいにする風通しの悪い三等の食堂で、食事をする時間がきたということだ。

「行きますか」とエヴェレットは聞いた。

「いや、もうちょっとしてから」とデントンはぎこちなげに答えた。「もう少し景色を見てからにしますよ。」

デントンは、食事の時間がすぎても甲板上にたたずんでいた。黄土色の水がすべすべした白い船体のうしろで、しずかに航跡を描くのをみつめていた。コウモリの灰色の翼をはり合わせたような、ピンと張ってごつごつとした帆のジャンクが後方にただよっていくのが見えた。彼は、緑色の濃淡のある碁盤状の水田をみつめ、時おり集落をおおい隠す羽毛のような竹林の背後から、たまに鳴りひびく鐘の音に耳をすませた。日ざしが徐々に強さを

増してきた。頬がほてってきた。彼はしかたなく救命ボートのかけに身をよせた。しかし、あいかわらず風景をみつめ続けていた。

そしてとうとうお目当てのほとんど未知のもの——上海の街が、もやにけぶる前方にその姿をあらわし始めたのだ。まずは高くたなびくいく筋もの黒煙。しかしそれをはき出す煙突群は、まだ視界にはいってほこない。ついで大廈高樓のくつきりとした輪郭があらわれ、その窓は陽光にきらめいている。さらに、先端のどがったクレインのごつごつした爪や、葉を落として枝だけになった木のような船のマスト群といったぐあいだ。近づいてくる街をみつめながら、彼は低い間欠的なサイレンの響きを耳にした。と同時に、筋状に錆のついた定期船が、わきをかすめて下流の海の方へと滑走していった。しばらくの間、デントンはすすけた煙をほく二本のななめにのびた船の煙突と、船端にいならぶ乗船客のものいわぬ顔をながめていた。やがてその船は通りすぎた。彼はその船尾に力なくはためいているロシア国旗をみつめていた。旗の真下からは、スクリューに攪拌されて黄土色に泡だつ航跡がのびていた。また別の定期船が、彼らの背後から蛇行しながら上流へむかつていく。ほとんどデントンの

の乗った船の航跡上を進んでいくかのようだ。その船が航路中央のブイをゆっくりとまがった時、アメリカ国旗がマストからたれさがっているのが見えた。

つぎにゆっくりとカーブするや、デントンの乗った船は市街地の中央部にきていた。右舷側には幅広の緑地帯ごしに、正面に列柱を配した石造りの大きな建築群が建ちならんでいる。左舷側には灰色のうす汚いスラム街や工場、倉庫群が無秩序にひしめきあっている。川は、定期船、貨物船、石炭船、伝馬船、はしけ、そしてジャンクといったありとあらゆる種類の船でごったがえしている。これらの船と岸の間のゆるい流れのなめらかな水面には、さらに小さな船がゆっくりと動いている。船尾の一本槽でこぐサンパンという中国式の平底船である。岸壁からは絶え間ない喧騒がひびいてくる。さけば声やら鼻歌やら、車輪のきしむ音やら鎖のすれる音、そして汽笛や、荷を岸や伝馬船に積みおろすドスンという音。——これが中国なんだ。デントンはななかば浮かれ、なかにば恐れつつまた思うのであった。彼は階下におりていった。

六人用船室の他の人々の姿はすでになく、彼らのトラUNKと箱が室外に積まれていた。デントンはすばやく自